

福生の民俗

中間報告II

人生儀禮

福生市教育委員会

民俗調査として、昨年度は福生の農家の年中行事をまとめた。今年是通过儀禮(人生儀禮)を調べることにした。できる限り古い形式のものを調査することをねらいにしたので、当然老人から聴取する必要がある。それだけにその調査実施は急を要すると判定される。

今年度調査した通過儀禮の内容には、重要な柱が三つある。出産、結婚、葬式がそれである。

調査したものをまとめて気づいたことを記すと次のようである。

年中行事の場合は、福生という地域におけるある程度の共通性はあつたように思う。たしかに詳細に見れば部落(原ヶ谷戸とか加美とかの)による違いもあつた。

しかし通過儀禮の場合は異なる。葬式は寺の宗派による違い、結婚式は家の格式や財力によるものが大きいようである。

また同じ一つの家であつても、長男の結婚式の場合、次男の場合ということや、嫁を迎えるのか、嫁にやるのかということによつてもちががあるようなのである。

ところで出産関係は調査対象者が少なかつたが、その理由はつぎのようなことである。

すなわち、この調査では『福生の出産』を調べる関係で、福生に生まれ、福生に嫁いだという対象者を選定したからである。この基準に合致する女性を見つけようとしてもなかなか見つからない。男性の場合には対象者が多いのであるが、出産関係は女性から聴取しないことには話にならない。他町村から嫁いで来た女性を調査対象者を選んだ場合には、福生ではなく、他町村の内容が混入されると考えられる。そのためとつた配慮の結果がこのようになったということである。

出産

妊婦と俗信

妊娠中コンニャクや草もちや流産するから食べてはいけ
ない。

産婆

お七夜、オビアケの時に産婆さんにつけ届けをした。
ほとんどはお七夜で縁切りになる。その後のつけ届けはし
ない。

産婆の受診

妊娠三ヶ月目位に妊婦がたのむ。以後一ヶ月に一回巡回し
てくれた。

初誕生

初誕生の時は赤飯を炊くくらいでモチはつかなかった。
なお、はじめての誕生日前に歩くと「ブツエボタモチ」
と言って、重箱にモチをいくつ入れて歩けるか、歩かせた。
ふつう一年たたずで歩く子は少なかった。

出産祝い

産後すぐに嫁の実家に知らせると、実家からお祝いでくる。

米一〜二升、かつをぶし、テカケ（赤ん坊の着る麻の葉模
様の産着）などを持つてくる。

出産前後の食物

産前は特に制限はなかったが、産後はおかゆ、かつおぶし、
みそづけ、やきしおを一週間ほどは食べた。
その後は普通食になる。しかし百日間くらいは油のもの、
魚などは禁じられていた。

赤ん坊の食物

母乳がほとんど。出ない者はほとんどいなかったが、その
場合は牛乳、オモユ、スリコ（米をいつてスリバチでひき、
それに砂糖をまぜたもの）などで母乳のかわりとした。

妊娠の通知

婚家の母親にまず話をした。「子どもがはじまった」と普
通は言った。

腹帯(1)

妊娠してから五ヶ月目の戌の日にしめる。サラシが一反位
実家より届けられる(2)ので、それをしめる(3)。使用後は保
存しておき、オムツなどに利用した。内出の野島きよのさ
んによると、戌の日につける理由はわからないが、その日

につけると安産だといわれた(4)。

(1) 中福生の村野ふくさんによると腹帯・岩田帯という。

(2) 野島きよのさん宅では本人が買った。

(3) 野島きよのさん宅では何も書かず真白いままに、中福生の森田惣助さんの家では、「寿」の字をお産婆さんに書いてもらってしめたという。

(4) 中福生の森田惣助さんによると、子どもを大きくするためにしめるのだという。

出産

内出の野島きよのさんによると、子どもは嫁ぎ先の、裏の奥座敷で生んだものだという。

タタミの上にムシロを敷き、その上にふとんを敷いて、更にその上に座ぶとんを敷いた。タタミはお産をする場所だけあげておいた(1)。

(1) 村野ふくさんによると、嫁ぎ先の奥の座敷で、ふとんの上にうつぶせになって産んだ。

産の神

尾崎の観音様へ『子どもを授けてください』と祈願に行つた。

お礼まいりには『そこのないひしゃく』や『絵馬』を奉納した。

中福生の森田惣助さんによると、永昌院には子育て観音があり、ここには出産のあと、『丈夫に育つように』と頼みに行つた。そのほか家によつては青梅の新町や東大和の塩釜様へも行つた。

長沢の田村富十郎さんによると、長沢部落では塩釜講というのがあつて五十〜六十軒が加入している。毎年一回代参の者が行く。

講元は一人で当番は前年の代参者がやることになっている。当番の者は代参者が帰つてきたときにお日待ちをやる準備をする。

身分け

ヘソの緒はとつておく家、捨ててしまう家の両方があるようである。

内出の野島きよのさんによると、後産は方角の良い場所に埋めるといふ。

帯明け(1)

男児のときは三十一日目、女児の場合には三十三日目(2)にお宮(氏神)へお参りに行く。この日は姑につれられて(3)、赤飯、酒を持って行く(4)。神主が男児の時は額に墨、女児には紅をつけてくれる。産婆さんにご馳走をし、お礼をする。

(1) 長沢の田村富十郎さん宅ではお宮参り、ウブアケという。
ウブアケという家が多いようである。

(2) 日についてはさまざまであり、男三十一日、女三十日というところ、男三十日、女三十三日などいろいろある。

(3) 実家の母親がつれて行く。都合の悪い時は婿方の仲人がつれて行く（中福生の森田惣助さんによる）

(4) 内出の野島きよのさんによると赤飯とかつおぶしを持つて行く。

初湯

生まれてすぐに(1)産婆さんを入れる。お産した場所に、ムシロを敷き、その上にタライをのせ、初湯をする。湯はその年の恵方(2)にする。産婆さんは七日までは毎日来て湯に入れた。

(1) 内出の野島きよのさんによると翌日入れた。

(2) 縁の下にする（村野ふくさん）、日陰にするなどいろいろ。

お七夜

七日目に名前をつける。この日名前を書いたものを神棚にあげる。

セツチン参り

お七夜の日には産婆さん(1)が赤ん坊の頭にオムツをかぶせて抱いてお参りをする(2)。その時、セツチン（外便所）の外に米をまいておく。

(1) 内出の野島きよのさんによると、野島さん宅では姑がつれて行つた。

(2) 内出の野島きよのさん宅では、線香と米を持って行つた。

産着

嫁の実家から届けられる。男女とも麻の葉の模様(1)のついたものであつた。

(1) 村野ふくさん宅では、男児はのしめ模様、女児はソウ模様のものであつたという。

また内出の飯野富十郎さんによると男は青色、女は赤色だつた。

食い始め(1)

百日目にやる。お膳立て一切を新しくつくり、赤飯を炊き、それを一粒口に入れる。

(1) 村野ふくさん宅では食い初め、中福生の森田惣助さん宅ではお箸はじめという。

帯解き

男女とも満七才でやる。十一月の中旬、親子が正装して神社へお参りをする。

紅白の丸いモチをつくり、ハンダイに入れてお祝いを貰った家にお返しをする。ウワオキにはカツオブシかスルメをつけ酒をつける。

なお明治七年九月生まれの村野ふくさんの話によると、昔は一部落で一軒かそこらの大尽でないと帯解きはやらなかった。今のよう盛んになったのは第二次大戦後のことだという。

厄年の赤ん坊

親が四十二才のときの子どもの場合、親が一度捨てるまねをする。前もって知り合いの人と打ち合わせておき、辻などへ一度捨て、そして拾ってきてもらう。厄年っ子という。

お祝い

女兒の場合、三月には雛、男児の場合、のぼり、人形が親戚や知人から届けられる。お返しは雛返しの時は餅、ハマグリ、五月の時は餅か赤飯、かしわもち、かつおぶしなど。

結婚

恋愛

ナレアイともいう。本人同志が結婚を約束している間柄のことをいうが、見合い結婚が多かった時勢だけに例は少ない。

また親がどうしても結婚を認めないで、無理に離された、ということもあつたようである。

ヨバイ

大正はじめころまではあつたらしい。若い者が、農繁期や養蚕時期に手伝いに来ている女性のところに、夜あそびに行つた。

福生や熊川には、当時製糸場もかなりあつたので、多くの若い女性が住み込みで働いていた。そういう女性の所へも土地の若者が遊びに行つた。

中には、結婚し、福生に世帯を持った者も多いということである。

一般に恋愛関係にある男女を、他の人たちは、色男・色女と呼んだ。

若者組(1)

男子が数え年十五才(2)になると、一月七日に本人が酒一升

を持参して部落総会（歌い初めといった）にあいさつに行く。それ以後、庭場（部落）づきあい、一人前扱いされる。

鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、婿の若衆組加入ということもあったという。この場合、婿は長老につれられて、一月七日の歌い初めに酒を一〜二升持つて行き紹介してもらった。

(1)長沢の田村富十郎さんの話では、若衆組ともいったという。
(2)長沢の田村富十郎さんの話では十七才だったという。

婚域

結婚相手はどの辺から見つけたかというところ、福生の場合、一般に羽村や秋川、瑞穂など近隣の村からが多かったようである。
その場合、どのようなことが重視されたかというところ、嫁や婿をもらう家柄に見合った家であるかどうかということであつた。家柄は財産・由緒などにより決められたようである。

ハシカケ(1)

結婚話をはじめに持ち出した人のことをいう。隣組、親類、行商人など、男女の双方を知っている人がなる。

原ヶ谷戸の木村和男さんによると、ハシカケの人が『あそこによい娘がいるがどうだろう』と、男の家に話を持ってくる。その男（婿）はハシカケにつれられて顔を見に行く。ハシカケは菓子折を持つて行つた。帰つて来て、本人がよい、となつたら、親が相手方（嫁）の近隣で相手方のようすを聞く。相手方からもこちらのようすを近所に聞きにくる。それで話はととのつたことになる。

なお、ハシカケが話を持つてくる場合、相手方の年まわりや方角などを考慮に入れたものだという。

(1)内出の石川長治郎さんの話ではハシワタシともいったという。

結納

結婚話が始まり、二ヶ月目ないし四ヶ月目におこなつた。大安の日を選び、午前中に先方の家に着くように出かけて行く。

ハシカケ・世話人（仲人）・親戚代表・お供の五人(1)が、進物一そろい・結納金・帯代・菓子折をハサミ箱に入れ、お供がかついで行く。両方には柄樽（柳樽）一対を下げて行く。ハサミ箱には、財力のある家では自家のを使ったが、普通の家の場合は、部落共有のものを使った。

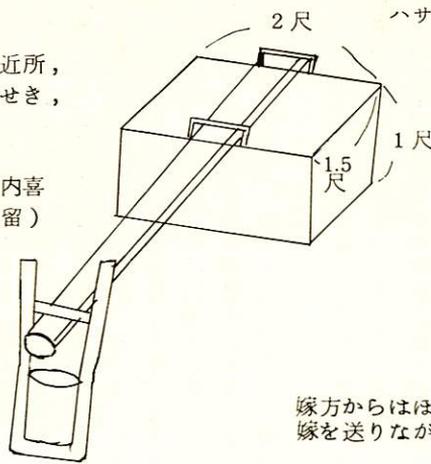
一行が婿の家を出る前、祝い酒を飲み、うどん（ソバ）を食べて出かける。

ハサミ箱の図

行く人 世話人, 近所,
ムコ, 親せき,
オトモ

持ち物 柳樽(家内喜
多留)

服装 羽オリ,
ハカマ



●目録返りのものを入れる

- ・のし
- ・スルメ
- ・カツオブシ
- ・ユイノウ金
(帯代)
(ムコの場合
ハカマ代)
- ・ミヤゲ

嫁方からはほぼ同じものを、
嫁を送りながら返す

〇〇〇〇様

〇年〇月〇日

氏名

右之通り幾久敷芽出度御受納下さるべく候 以上

目録

- 一、勝男節 壺連
- 一、寿留女 壺台
- 一、子生婦 壺台
- 一、末廣 壺對
- 一、友志良賀 壺台
- 一、家内喜多留 壺荷

最初、先方の世話人の家に行き、酒代と菓子折を出す。それからその世話人の案内で嫁の家に着くと座敷で、嫁の家から会席膳を借り、その上に進物をのせし出す。先方は、世話人・親戚代表・家族の者が立ち合い、こちらの世話人が口上を述べる。酒肴が出て、式の日どりなどを決める。そのあと一行は婿の家に戻り、ハカマ代として嫁の家から預ってきたものを出し、式の日どりなどを報告する。ここでも酒肴が出る。以上のすべてを日帰りでおこなう。参考までに鍋ヶ谷戸の野島俊三さん宅にあった目録を掲げてみる。

(1) 家により二〜三人のこともあるようである。

カタ入れ(1)

結納から結婚式までの間が長く、年を越してしまふような場合、あるいは結婚式の時、年まわりが悪くなることが予想される場合、親が死んだというような場合、嫁になる人を結納の日に婿になる人の家へ仲人がつれてきて一〜二晩泊める(2)。これをカタ入れという。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、アシ入れ、コシ入れともいう。

(2) 志茂の清水吉右エ門さんの話では、カタ入れというのは、正式の御祝儀をやるには結納などをとり交わさなければならぬので、略式に結納もなにもしないで、仲人や隣家、親戚代表くらいをよんで、式のまねごとをするのをいうという。

結納金

その時の相場があるのでそれに従う。家の格によつても変化する。結納金は嫁の仕度金として出すわけで、金の多少により支度の程度が決まる。

なお嫁方から婿の方へは、ハカマ代として結納金の半分くらいを返した。

クチガタメ

ハシカケと世話人(仲人)が大安の日の午前中に嫁の家に酒を一升持つて行き、婚約の確認をし、結納の日を決める。先方では酒肴と昼食が出される。嫁の家では、両親・嫁・組合(近所)代表の人が同席する。

なお、クチガタメを結納と同じ日にやつてしまう場合もある。

仲人(1)

嫁方、婿方の両方でたてるのが普通。部落の顔役、親戚をたのむ場合が多く、時にはハシカケの人にやつてもらう場合もある。

仲人の役目としては、結納の時から結婚式の時の一切のめんどうをみる。なお式の前後でも、両家の間に不都合なことが起つた場合には、間に立つて話をまとめた。それを『仲人のゾウリキラシ』といい、いろいろな苦心も多かった。

(1) 志茂の清水吉左エ門さんは世話人といい、南の細谷市蔵さんはバイシヤク人という。

嫁迎え

婿、仲人(世話人)、近所代表、親戚代表など五〜七人で嫁を迎えに行く。人数はたいがい奇数。結納の時持参したものと同じ品および名刺がわりに半紙一帖に婿方参列者の名

前を半紙半分に書き、水引きをつけたものを参列者の人数分持っていた。

服装は男は羽織、ハカマ、ゾウリ、白タビ、女はモヨウの着物、ゾウリ、白タビをはいて行った。嫁の家では表の縁側から座敷にあがった。

(1) 志茂の清水吉左工門さんによると、人数は仲人夫妻、ハシカケ、兄弟姉妹代表から二名、近所総代一名、婿、親戚代表、お供の九名がついていったといい、家により、同じ家でも誰の結婚式かということによりいろいろちがったようである。

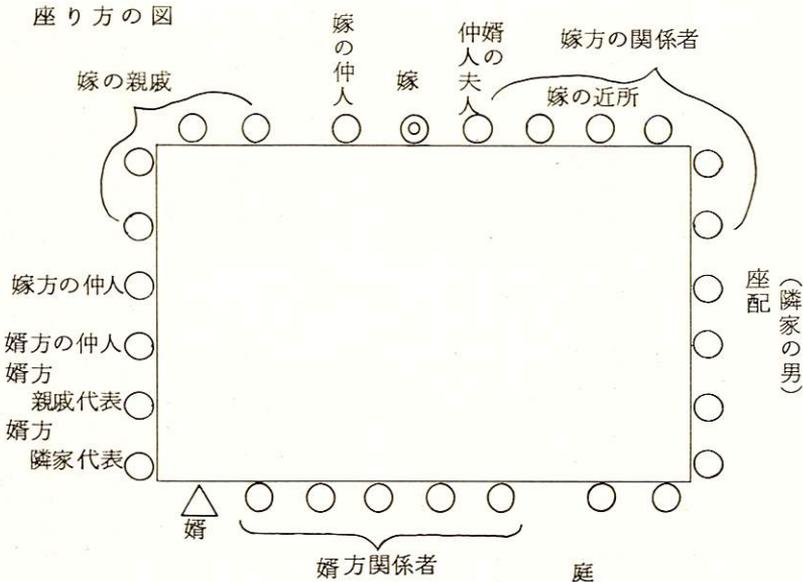
荷受け

ご祝儀の当日、花嫁と一諸の行列で、大八車に二〜三台にのせて運んで来るのが普通だった。嫁の家で宴会をやってくるので、たいていは夜に入ってしまうので提灯をつけて運んできた。

なお、家によつては、式の前の大安の日に運んだところもあつたようである。この場合、仲人が立ちあうのが普通であつた。婿の家では酒肴と食事を用意しておき馳走し祝儀を出した。

嫁方の儀式

おひろめ式という。嫁の家の座敷でおこなう。参会者の座り方は家によつていくぶんちがいがあつた。(下図参照)



儀式の次第も家により多少のちがいがあがるが、大略を記すとつぎのようである。

座につくと両方の仲人がそれぞれの参会者を紹介する。各人が座る前、座には膳が並べられていて、口とりが膳の上に用意されている。

一同が座ると、座配(ザヘイとよんでいる)があいさつをする。つぎに茶菓が出される。やがて冷酒が出される。この時、座配が毒味をし、正座(しょうざ)に座っている両方の仲人に盃を渡す。両方の仲人は、冷酒を注いでもらつて飲み、飲み終つたら『冷酒をいただきましたが、いかがいたしましたしょう』という。すると座配が『おめでたいことですから左右にとり結んでおひらき下さい』という。盃は正座からとり結んで(婿方の仲人の盃は嫁方の参会者の方へ、嫁方の仲人の盃は婿方の参会者の方へ)左右に廻され座配のところにくる。

つぎに燗酒が出される。嫁方の近所、親戚の娘が酌をする。これをクサビの酒という。頃を見はからつて、おすいもの、煮魚、揚物、刺身、折詰、赤飯などが出される。おすいものは嫁の衣装がかわるたびごとに出される。二の盃が末席(座配)から上席(正座)へまわる。宴はにぎやかになり、歌などが出る。酔の物が出されると『これでごちそうは最後です』ということになる。終りに近づき、三の盃がまわされる。ノポリツメといい、大盃を使い、末席からまわす。

座の途中で、婿と嫁方の両親・兄弟(多い場合は代表一人、親戚(ふつう代表一人)との間で、親子盃・兄弟盃・親戚盃が交わされる。やり方は、座を移動しないで、盃のみお酌の者の手を通し、両者の間を移動する。盃は式用のを使う。なお嫁は頃合いを見て、仲人夫人につれられて氏神様にあいさつに行く。

三の盃が正座までまわると、正座の者が『おつもりしてください』とあいさつをし、ソバが出されて儀式(宴)は終わりとなる。

宮参り(1)

宴の途中、嫁方の仲人夫人につれられて氏神様へお参りに行く(2)。隣組へもあいさつする。

お賽銭と赤飯、酒を持って行く。お供が一人、つくこともある。

(1) 鍋ヶ谷戸の野島俊三さんによると、いとまごいという。

(2) 鍋ヶ谷戸の野島俊三さんによると、ご祝儀の日の朝に近所のおばあさんにつれられて行くという。

(3) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの話では、おさんご、おひねりを持って行くなど、いろいろある。

ムカエ酒(1)

婿の家の方から時間を見計つて、隣家の人が五〜七人、嫁

を近くの辻まで迎えに出る。この時『嫁ムカエ酒』といつて一升持つて行く。たいてい嫁の行列は夜になるので、むかえに出る人は提灯を持つている。辻の近くの人達は、行列を見ようと出ているが、酒をふるまってもらう。やがて嫁の行列が見えたら、むかえに出ている者一名が婿の家に知らせに帰る。婿の家では、嫁を送ってきた人たちにワラシ酒(2)を出す。

- (1) ムカイ酒というところもある。
- (2) 志茂の清水吉左エ門さんなどは、このワラシ酒のことは知らない。

嫁入り行列

並ぶ順序は特別に決つてはいなかったが、仲人が先にたつた。嫁方からは婿方から嫁迎えに行つたのとはほぼ同人数がついてきた。各人が提灯を持つて歩いた。ユミハリには名前をつけ、表には定紋をつけた。

嫁入り道具

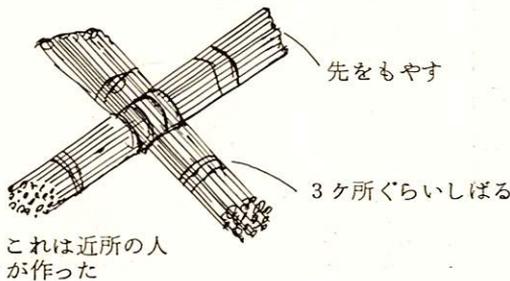
牛車や大八車に積んで、箱物はコモでくるみ、花嫁行列よりも先に出て婿の家に運んだ。婿の家では、道具を座敷に並べておいた。荷物が多い時は前の日などに持つて行つたこともある。

トンボまたぎ

嫁が婿の家に入るときは台所から入る。その時、麦ワラをタイマツ状に束ねたものを二束、火をつけて消し、その上を嫁がまたぐ。これをトンボまたぎという。麦ワラは組合の男の人が二人で持ち、嫁の介添えは婿方の仲人夫人がする。

トンボまたぎ(人家式)

嫁が婿の家に入る時、玄関に、ムギワラを束ねたものを半分位焼いたものを交叉して置き、それをまたいで入つた。玄関から入るのは嫁だけで、あとの客などは座敷へ直接上つた。



トンボ盃

トンボまたぎのあと、婿方で頼んでおいた両親がそろった家の子ども（男と女）がお酌をし、嫁に酒を飲ませる(1)。盃は三三九度の時使う盃を使う。

なお、この子どもは、三三九度の時にも酌をする。

(1) 加美の横田奎介さんによると、横田家では組合の人が酌をするという。

御祝儀（結婚式）

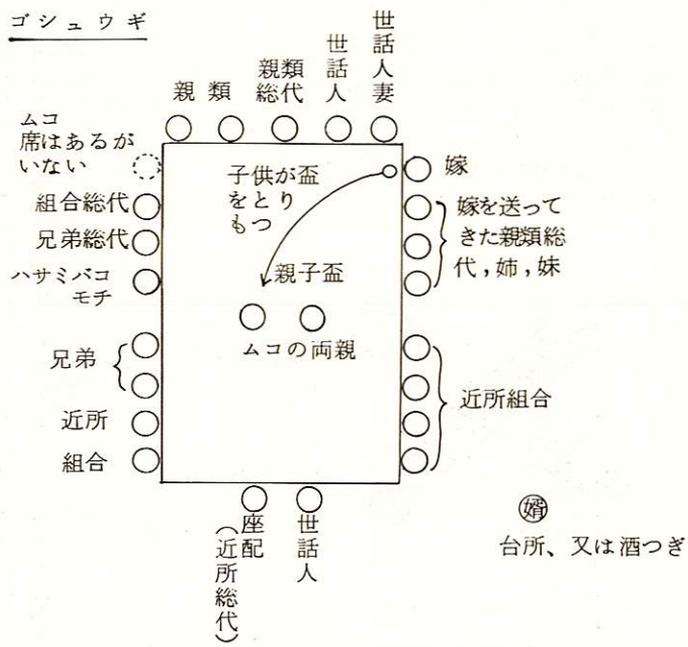
普通は婿の家の床の間がある座敷です。座り方は家によりいろいろあるようである。（下図参照）
式の進行、食べ物などは嫁方での式の内容とほとんど同じである。

特にちがうところは、三三九度の盃をとり交わすことである。

三三九度(1)

御祝儀の宴の途中で婿が嫁の席の前に行きおこなう(2)。酌は婿の近所の子どもで、両親がそろっている家の子ども（男女）がなり、婿方の仲人が側で指図をする。

やり方は、七五三の盃の一番小さいのを三宝にのせて婿の前に持って行き、二人の子どもが同時に盃に酒を注ぐ。婿は三口でそれを飲む(3)。つきに酌をしている男女の子ども



があやをと(位置を入れかわること)、嫁のところに行き、同じようにして注ぎ、同じように嫁が飲む。なお子どもが盃に注ぐ時には、少しずつ三回に注ぐ。婿と嫁との間で、このようなことを三回くり返す。

なお、三三九度をする時、嫁と婿との座の間にシヨクダイを飾る(4)。

(1)アイサカズキというところもある(加美の横田奎介さん宅)

(2)座敷でなく、別室でやることもある。(加美の町田一三さん宅・永田の設楽美知さん宅)

(3)嫁がさきに飲むところもある。(志茂の清水吉左エ門さんによる)

(4)鍋ヶ谷戸の野島俊三さん宅では飾らないという。

親子盃、兄弟盃、親戚盃

三三九度がすんでから、同じ盃を使って、嫁と婿の両親の間でおこなう。婿の両親が座敷の中ほどに出ておこなう。

酌は子ども(三三九度の時の)がする。子どもが注ぐと、婿の親が先に飲み、そのあと盃を嫁にまわし、嫁が飲む。

親子盃という。

親子盃が終つたら、婿の兄弟姉妹と嫁の間で同じように盃を交わす。兄弟が多い時は、代表して長兄(長姉)との間でおこなう。

なお、家によつては、親戚代表との間で親戚盃をおこなう場合もあった。

シヨクダイ(1)

御祝儀の日、婿の家で近所の人がつくる。原ヶ谷戸の木村和男さんによると、四角い木の盆の上にいるち米を山のようのにせる。その上に材料はなんであつたか忘れてしまつたが、ツル・カメの形をつくりのせる(2)。そして松・竹・梅の枝を折つてきてそこに立てる。

シヨクダイはできあがつたら床の間に置いておき、三三九度の盃の時、婿と嫁の座の間に飾る。すんだあとも床の間に飾っておく。

(1)鍋ヶ谷戸の野島茂雄さんはシマダイという。

(2)志茂の清水吉左エ門さんによると、材料は大根・人参・サツマイモなどなんでもよいという。

高盛飯(1)

小豆飯(2)を茶碗に山盛りにする。御祝儀の日に嫁の家で隣組の女の人が用意する。

三三九度がすんでから隣組の女の人が嫁の座のところに行き、婿の仲人夫人が皿にすこしとつて、嫁に食べさせる(3)。残りは勝手へ持つて行く。誰が食べてもよい。

(1)加美の横田奎介さんによるとオタカモリという。

- (2) 原ヶ谷戸の木村和男さんの家では赤飯だというし、鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの家では白米飯だという。
- (3) 永田の設楽美知さんによると、婿も食べるまねをするという。

嫁の茶

御祝儀の時、宴の最後に嫁がお茶を出す。嫁の茶という。嫁はこの時、ふだん着(1)に着がえて茶を入れる。一番先きに仏壇に供え、そのあと、婿、婿の両親それから近所や親戚の人など参会者に出す。

(1) 原ヶ谷戸の木村和男さんによると、嫁はお茶汲み用の着物として特別のものを作って持って行ったものだという。

添い嫁(1)

花嫁行列の時、嫁の親戚・近縁の女性で独身の者が、晴れ着を着て嫁といっしょに来る。これを添い嫁という。

志茂の清水吉左エ門さんによると、添い嫁というのは、嫁に間違いがおこつた時は嫁の代りになるという。

(1) 永田の設楽美知さんは知らないという。

前座敷(1)・後座敷

御祝儀の日、嫁がくる前に御祝儀の席(本座敷という)に招待できない客を招いて宴を開く。これを前座敷という。

又、一週間くらい後に、婿の友人などを招いて馳走するのを後座敷という(2)。どちらも招待客が本座敷だけでは入りきれない場合に開く。

(1) 近所座敷というところもあるようである。

(2) 志茂の清水吉左エ門さんによると、御祝儀の日、宴のあとお勝手に働いた人々に座敷に座ってもらつて酒肴を飲んでもらうのを後座敷という。

村まわり

御祝儀の翌日、近所のおばあさん(1)につれられてお寺や神社、部落中の家をまわる。

名刺代わりに半紙一帖にのし紙をつけて、『進上』と書き嫁の名を書いて隣家に配つた。

まわる順序は各家で決つていたようである(2)。

(1) 婿の場合は男、嫁の場合は女につれられて行ったといふところもある(鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの家)

(2) 加美の横田奎介さんによると、まず組合の家をまわり、つぎに近くの親戚・お寺・そして最後に鎮守様に行ったといふ。

また、鍋ヶ谷戸の野島俊三さんの家では、まず氏神様、つぎに近所をまわり最後にお寺に行ったといふ。

里帰り

結婚式の日から三日目(1)(ミツメという)に嫁を婿の両親がつれて(2)嫁の方の仲人の家にまず行く(3)。仲人礼(結納金の額の一割くらい)酒代、菓子折を持って行く(4)。仲人宅では酒肴を出す。

つぎに仲人につれられて嫁の家に行く。酒代、菓子折を持って行く。ここでも酒肴が出される。

婿の両親は嫁を残して先に帰る。そのあと、嫁は嫁の両親につれられて婿の仲人の家に行く。持参するものは婿側のものと同じ。それから婿の家に来る。ここでも酒肴が出され、夕食を食べて嫁の両親は帰る。

(1)長沢の田村富十郎さんによると、式後三日目くらいの奇数の日を選んだという。

(2)加美の横田奎介さんによると、嫁をつれて行くのは、婿の父親、帰りは嫁の母親だったという。

(3)鍋ヶ谷戸の野島俊三さんによると、先方の仲人が嫁の家に行つて待つていることもあった。

(4)長沢の田村富十郎さんによると、赤飯、ウワオキとしてカツオ節かスルメに礼金を持つていった。また鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、このほかに親の名刺としてノシ紙をつけた半紙を持つて行つた。

カミアライ

式のと一週間くらいたつてから、手土産を持つて母親といっしょに行く。一泊する。式の時、高島田に髪を結つたので、髪が油でベタベタしている、それを実家で洗ってくる。

夏あがり

お盆の前、嫁が実家に帰り一泊する。

長沢の田村富十郎さんによると、婿の家で着物を作つてもらつて、嫁はそれを着ていった(1)。両方の仲人宅と実家に、フカシマンジュウを重箱に入れて持つて行つた。嫁の実家では反物を買つて返したという。

(1)加美の横田奎介さんによると、ヨメカタビラとよんでい

秋あがり

加美の横田奎介さんによると、結婚式後の最初の年だけ、晩秋蚕が終つたあと、実家に帰り、嫁は一泊した。秋あがりといつた。

嫁の里帰り

そのほかに嫁は正月と盆のやぶ入りの日に実家に行き、十七日に帰る。

正月はまゆ玉のダンゴ、盆の時は手ゾウメンを持って行く。
又、祭や農繁期の時にも帰った。

絶縁

結婚式の前は破談、式後の場合は離縁という。ほとんど例がない。

一般に女の方から破談にする場合は結納金の倍返し、男の方からの時は結納金は返してもらえない（結納金を流してしまうという）のが普通だった。

離婚の時は、嫁が持参した財産のすべて嫁に返し、子どもがいる場合は婿方で引きとる場合が多かったようである。

葬式

オトムライ(1)

ほとんどが仏式であるが、神式（宝蔵院）のところもある。死者が大人の時も、子どもの場合も同じ呼び方である。

なお、熊牛の渡辺継二郎さんの話では、部落内や近親者の場合はオトムライといい、他村や近親者でないときはトムライという。お葬式というようになったのは、昭和のはじめころではなかったかということである。

(1) オトムライとよぶところが多いが、カワリゴトというところもある。（鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによる）

予兆

死の予兆の話として、つぎのようなものが聴取できた。

(イ) カラス鳴きが悪い

カラスの鳴き方が悪いと死人が出るという。なお、カラスの鳴き方でも、カラスが集団で鳴くときは火事、地震などの天変地異の前兆であるといい、一〜二羽で淋しい鳴き方の時は死者が出るなど悪いことがおこる前兆と区別するところもある。（熊牛の渡辺継二郎さんによる）

(ロ) ヒトダマが飛ぶ

ヒトダマが飛ぶと死者が出る。

南の細谷市蔵さんの話では、ヒトダマはまだ息があるう

ちに出る場合、息が切れてから出る場合というようにいろいろある。

今から五十年くらい前、ラッキョウ型で青白く、赤味を帯びたものが、死者の出た近くの家から出て横になびくような格好で高さ一〇〇メートルくらいのところを飛び、墓地で消えたのを見た。夜八時〜十時ころではなかったか、という。

また、永田の設楽美知さんも大正ころまで二〜三度目撃したことがあり、やはりラッキョウ型をした青白い火の玉だったという。

(ハ) 戸口をたたく音

田村富十郎さん(長沢)の話では、夜半に家の戸口をドンドンたたく音がした。翌日親戚の人が死んだという報を受けた、という。

志茂の清水吉左エ門さんの話にも同じようなものがあつたが、こちらはお寺の戸口で人の声がした。翌日、その人はふだんしたこともないのに近所にあいさつをしてまわつた。翌々日亡くなった、という。

魂呼び

この項について調査対象者中には知っている人はいなかった。

志茂の清水吉左エ門さんによると、息が切れたとき、血筋の一番近い者が亡くなった人のそばで、その人の名を呼ぶことはある。

ヒキヤク(1)

隣組の人が二人一組になり、濃い親類の家へ、葬式の日時を知らせて行く。昔は徒歩であつたが、その後自転車で行くようになった。

持つて行く物は特別にない。ヒキヤクが行くと、先方では酒肴を出し馳走した。

ヒキヤクは今では電話ですませることもある。

なお、死者が出た時、寺へは隣家の者が、一番はじめに行き、葬式の日時を坊さんと打ち合わせてくる。

部落中には隣組の人が知らせて歩く。これを牛浜ではコロバンという(2)。

(1) 南の乙津光造さんによると、トズケル・サタをするといひ、鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、ヒトに行く、ともいう。

枕ダンゴ

死者が出ると、近所の人がウルチ米を洗わないで挽いてダングをつくる。これを枕ダンゴという。ダングの形はソロバン玉状につくるところ(1)と丸くつくるところがある(2)。庭に棒を三本立てて縄でしばり(3)、そこにカラの鍋をかけ

る。それから鍋の中に水を入れてゆでる（さかさ水という）。ダンゴはたくさんつくるが、その中の四十九個(4)をカゴ屋から貰ってきた(5)竹のカゴに入れ、死者の枕元に供える。このダンゴは、葬式のあとのダン払いのときにお寺へ持って行く。

なお年寄りが死んだ時は、近所の人が『○○さんのように長生きにあやかりたい』と貰って帰ってたべたものだという。

(1) 南の細谷市蔵さん、志茂の清水吉左エ門さん、永田の設楽美知さん、熊牛の渡辺継二郎さんの家ではソロバン玉状にするという。

(2) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さん宅では丸い。

(3) (イ) 梯子をつかう（牛浜の渡辺継二郎さん宅など）

(ロ) 竹と木の棒を使う（鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さん宅）

(4) 長沢の田村富十郎さん宅では五〜六個。

(5) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの家では茶碗に入れて供える。

枕飯

枕ダンゴをつくる日、庭で炊いて茶碗に山盛りにし、ハシ一膳を立てて、葬具屋から買って来たモミの木で作った白木の膳の上のせて、死者のそばに供える。

枕飯は死者を埋葬する時、穴の中に入れる。

なお、枕ダンゴ・枕飯を炊いた時に出る灰は、サンダワラ

の上のせて、お寺から貰ってきたオハライ(1)をそこに立て、家の木戸に置いておく。

このオハライは、葬式の日、埋葬後、会葬者がオハライして貰うのに使う。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、神主さんからもらってくるという。

死者の寝かせ方

死者の頭が北の方角になるように寝かせる。北枕という。

動物除けのために、刃物をそばに置く(1)。

(1) 熊牛の渡辺継二郎さんの家ではふとんの下に入れておく。

湯灌

通夜の日、肉親や兄弟、親戚の者が立ち会う。

座敷(1)の畳の上に、あるいは畳を裏返しにして、その上にムシロを敷く。大ダライに水を入れ、あとで湯を入れ（これをさかさ水という）、死者を裸にし、その中で新しい手拭いで洗う(2)。近親者の一人が線香に火をつけたのを持ってそばに立っていた。なお洗う時、一番近縁の人は縄ダスキをして洗った。

タライの湯水はアゲ板をあげて床下にこぼす(3)。それからタライをひっくり返し、その上に死者を座らせ身体を拭く。縄とムシロは埋葬の時、棺といっしょに墓に埋めた。

立ち会う人は、湯灌の前冷酒を飲む。これを湯灌酒という。残してはいけないといわれていたので、湯灌酒の量は立ち会う人数により、あらかじめ量を見つくるって用意しておいた。

(1) 加美の町田富二さんの家では納戸でした。

(2) 志茂の清水吉左エ門さんの話では、身体を洗うということは少なく、ほとんどは身体を拭く程度であるという。

しかし、昔は洗ったものだという。

(3) (イ) 南の乙津光造さんの家では便所のそばの縁の下にすてた。

(ロ) 永田の設楽美知さんによると、日かげに穴を掘つてすてた。

(4) 永田の設楽美知さん宅では、湯灌をしたあとで、豆腐を肴に冷酒を飲んだものだという。

死装束

晒を買ってきて経帷子を縫う。この時、物差しは使わず、糸は結び玉をつくらなくて縫う。今は葬具屋から買ってくる。足には白足袋を反対にはかせ（右足のを左足にというように）、頭に三角巾、手に手甲、脚に脚伴をつける。そのほか、晒で頭陀袋を作り、中に六文銭を入れ、死者の首にかけるようにする。六文銭は、今は印刷した手形を入れることが多いが、時には十円玉を五〜六枚入れることもある。

なお、死者が直前まで着ていた着物は、脱がせ、洗たくをしてから日陰で北向きに干す。

入棺

湯灌が終わると納棺をする。昔は座棺（タテ棺ともいう）であった。動きどめにふとんや着物などを入れた。『あそこは大旦那だから寝棺（ヨコ棺）だね』などといったものだという。

副葬品

死者が生前、日常使用していたものや、タバコ、酒などのような好物を棺に入れた。

葬式組の諸役分担

隣組で葬式の準備をする。その仕事としては、飛脚に行く、天蓋、はた貼り、シカバナ作り、穴掘り、柩かつぎ、香奠受け、引物の支度などをする。

また、炊事の仕度は組の女衆が当るが、男衆もウドンを作ったり、ゆでたりで忙しい。

穴番(1)

ふつうは部落中の全戸が軒並みに穴番となり、葬式ごとに五名(2)が当番となる。部落には順番を記録する帳面(3)が用

意されていて、前回穴番をすませた五名をシタ番といい、シタ番は葬列の時の旗持ちをすることになっている。

妊娠をしている者がある家や死者の隣組などで穴番の当番になった場合は、順番をとばして貫つて次の時に当番をすることになっていた。

穴番に当たると、葬式の日、穴を掘る位置を家人から聴いて、ソダ一束、ムシロ一枚、酒一升、豆腐二丁くらいを持って墓に行く。穴掘作業に入る前、穴番は冷酒を飲む。昼食時には家から迎えが行き、台所にムシロを敷いて穴番は昼をとる(4)。

掘り終つたら、穴番の中の一名が、穴の番(土砂が崩れ落ちて、穴が埋まらないように)のために残る。

なお他の穴番四名は、葬列の時、柩を担ぐ。又、埋葬の時、棺に晒木綿が巻いてあるが、これをほどいて、あとで穴番五名が均等分して貫つて帰る慣例になっていた。

(1) 南の細谷市蔵さんはメド番という。

(2) 南の乙津光造さんの地域では穴番の人数は七名であるという。

(3) 南の細谷市蔵さんによるとメド帳、永田の設楽美知さんは穴番帳とよんでいる。

(4) 永田の設楽美知さんの話では、隣組の人が墓地まで運んでくれるという。

出棺

カネツキが一番かねを鳴らして出棺を知らせ、二番かねで出棺する。

自宅で葬式をする場合、棺を家の庭で左廻りて三回まわす(1)。近親者や縁者も棺のあとについて廻る。

寺で葬式をする場合は、志茂の清水吉左エ門さんによると、家から葬列は出すが、棺を廻すのは寺の庭です。近親者や縁者がそのあとをつけて廻るといふのは同じ。そのあと寺の本堂で葬式をする。式場での座り方は、正面に向つて右側に男衆が、左側に女衆が座る。一般会葬者はここで焼香をすませる。香奠を貰った人へは家で引物と供物を手渡すということである。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの話では、三回半まわすというし、南の乙津光造さんの話では四回まわすという。

野辺送りの服装

男は紋付、袴、黒足袋に下駄、女は絹でこしらえた白い着物、味のついた下駄、髪型は丸まげか巻髪だった。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんによると、女の髪型は別にきまつていなかったという。

葬列

宗派によつて多少ちがいはあるようであるが、永田の設楽

美知さん（臨濟宗長徳寺の壇家）の話によると、年寄りが見た時の葬列の順序はつぎのようである。

- ①カネ（穴番の中から一名）
- ②六道（前に穴番をした人の中から二名）
- ③高張りチヨウチン（濃い親類の者が二名）
- ④大ハタ（前に穴番をした人の中から四名）
- ⑤造花（消防団とか各種団体の人に頼む）
- ⑥生花（親戚の人）
- ⑦施主花一對（死者の孫や身内の者二人）、

- そのあとに坊さん、薄い親戚の会葬者が続き、
- ⑧紙花（身内の娘さんや子どもが八名）
 - ⑨燭台（子ども二名）
 - ⑩香炉（長男の娘一名）
 - ⑪膳（長男の嫁）
 - ⑫写真（長男）
 - ⑬位牌（施主）
 - ⑭棺（穴番四名）
 - ⑮棺側（息子たち）
 - ⑯小天蓋（近所の人一人）

それから一般会葬者たちが続く。

細谷市蔵さん（南）によると、この葬列のとき、カネタタキがナムアミダブツと唱える。そうすると棺を担いでいる人も同じように唱和する。このように唱えながら家から寺まで行ったものだという。しかし今はもう唱えない。

葬具

棺箱は葬具屋から買ってくる。棺台、天蓋、リュウタツは寺にあるのを借りてくる(1)。カネは隣組が保管しているが、それを持つてくる。そのほか、ハタを四本作つて立てる。会葬者の飲食に使う膳碗は、部落に膳碗倉があつてそれを

使用した。

鍋ヶ谷戸の齋藤菊蔵さんによると、鍋ヶ谷戸では膳碗組は二十年くらい前に解散してしまつたという。

(1)南の乙津光造さんの話によると、リュウタツやコシは普通の家では葬具屋から借りるが、財力のある家では注文して作つたものであるという。

棺の形式

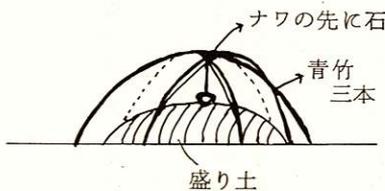
明治末年まではタテ棺であつて、中に死者を座らせたが、大正になつてからヨコ棺（寝棺）になつた(1)。

(1)南の乙津光造さんの話では、ヨコ棺になつた年代は大正末か昭和初期ではなかつたか、とのことである。

埋葬

志茂の清水吉左エ門さんによると、昔は寺で葬式が終つて、墓地に埋葬に行く時は、近親者や身内の者は、特別の草履をはいたものである。草履は埋葬がすむと寺ではきかえるか、そのあと隣組の人が燃やしてしまふ。

埋葬は、穴番が四人で縄がかかつてある棺をかつぎ、縄を切つて棺



を穴の中におろす。そのあと、施主が土をかけ、近親者、縁者が少しずつ土をかける。長沢の田村富十郎さんによると、この時、枕飯や枕ダンゴは中に埋め、野位牌、膳、湯のみ茶碗、野ゴンを置く。野ゴンは葬具屋から買ってくる。それが買えない家では、リュウタツなど葬列の時に使った青竹を割って盛り土をした土の上に立てる。こうするのは魔除けのためであるという。

火葬

瑞穂町箱根ヶ崎に組合火葬場ができてから火葬になった。熊牛の渡辺継二郎さんによると、その時期は福生が市制を施した時からではないか、ということであるが、異論もあるようである。

なお、志茂の清水吉左エ門さんによると土葬の時代でも、結核や伝染病で人が死んだ場合には火葬をした。ずっと以前は大神街道の西の方が火葬場であった。松林の中に畳一枚半くらいの大ききの穴を掘り、その上に鉄の棒をわたし、下に杉の葉や枯木、石炭を置いて石油をかけ火をつける。火葬の時間は、たいていは夕方から夜にかけてであった。太陽の出ている間は焼けなかつたのだという。その後、日光街道のそば（現在は基地内になっている場所）で火葬をするようになったが、この時は昼間でも火葬をした。

香奠

死者と縁故のある場合、近所づきあいをしている場合に包んで行つた。明治の末頃で二十〜三十歳（南の乙津光造さんによる）、大正はじめて鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さん宅では、隣組の葬式の場合一〜二円、親戚の時三〜五円くらいであった。

もつとも斎藤さんの話によると、昔は親類からの香奠はほとんどなく、そのかわり会葬者に引物として配る物などを持つてきたものだという。

お返しは、葬式まんじゅうかモチだけであつたが、その後、反物、フロシキなどが引物としてつけられるようになった(1)。

(1)南の乙津光造さんの話では、死者の生前の着物や反物であつたというし、同細谷市蔵さんの家では、引物としてイマサカマンジュウか米の粉でつくつた菓子、それにダイビキといつてヨウカンか菓子であつたという。

野帰

埋葬がすんで会葬者が施主の家へ戻つたとき、手を洗い、そのあと枕ダンゴをつくつたときにいつしよに作つたダンゴを一切れ塩をつけて食べる。

それから縁側に、タチウスが逆に描いた紙(1)がぶらさげられているが、そこへ行つて座るまねをする(2)。

(1) 熊牛の渡辺継二郎さんの話によると、昔はタチウスの上に本当に座ったものであるという。

(2) 志茂の清水吉左エ門さんの家では、タチウスの絵は逆ではないという。

(2) 南の細谷市蔵さんによると、南部落ではこのあと、葬式前日か当日、隣家の人が熊川神社からオハライをもらってきておき、そのオハライで会葬者の一人一人を隣家の人が払ったものだという。

ニワトキ

葬式の日、庭場中（部落中）の人に来てもらって、座敷で白米飯、オミオツケ（ミソ汁）、菜の物（角揚げといい、三角の生揚げが入った）の昼食を食べてもらって会葬してもらった(1)。

長沢の田村富十郎さんによると、その後、前記のようなものを準備することは大変なことだったので、ウドンに変わったという。

(1) 志茂の清水吉左エ門さんによると、明治の末年、志茂部落（庭場）の戸数は百軒くらいであったという。

シャバグネ

埋葬後、葬列の時使った青竹を割って垣根をつくり、棺をしばった荒縄でしばる。これをシャバグネという。

シャバグネは穴掘りの人達がつくる(1)。三十五日のときもあるが、四十九日にとりはずし、燃やしてしまう。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの家では、つくらないで葬具屋から買ってくる。

墓地

寺にある墓地（共同墓地）に埋葬する家がほとんどである。長沢の田村富十郎家では、個人墓地と寺墓地（共同墓地）との両方に墓地があつたが、今は寺墓地のみである。

田村さんの話では、長沢部落の佐藤姓、町田姓に神葬祭が多く、墓地は長徳寺の墓地の裏の方にあるそうである。

念仏会(1)

葬式の日、壇払いが済んで、夜、お寺から借りてきた十三仏の掛軸をかざり、その前に位牌を飾り、カネ、シメダイコをたたき、数とりを使い、ナムアマミダー・ナムアマミダンブツ・ナムアマミダー・ナムアマミダンブツ・ナムアマミダーとカネタタキの音頭で四十九回くりかえして唱える。近くの親戚と組合の人が参加する。念仏が終るとお茶菓子が出る。

壇払い

(1) 永田の設楽美知さんのところではやっていない。

葬式のと、初七日の墓参をしたあと仏壇の飾り物をすべ

て払う(1)。ニシメの肴で酒を飲み、そのあとうどんかソバが出る。
鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さん宅では、初七日のお経をあげ壇払いをしてしまふ。

初七日(1)

南の細谷市蔵さんの家では、死んでから七日目にやる(2)。坊さんは頼まないで、濃い親戚や身内の者が墓参をする。おさんご、線香、水、花を供え、七本ボトクを一本炭で消す。しかし、一般に福生では、葬式当日、埋葬をしたあとで、坊さんにお経をあげてもらい、おさんご、線香などを持って墓参をし、初七日をすませてしまふ場合が多い。
(1) 神葬祭では、五日祭というのが初七日にあたる。忌明けというのは神葬祭では五十日祭である。
(2) 熊牛の渡辺継二郎さんによると、昔は七日間というもの、毎日墓参をしたものだという。

忌明け

ユミアケというところもある。
普通四十九日目にする(1)。この日、坊さんに来てもらい、読経をしてもらう。墓に新しい塔婆を立て、近所や親戚の人が墓参をする。そのあと、酒肴が出る。位牌はこの日のあと仏壇に移す。

忌明けがすむまでは、ボクがかかっているといい、鳥居をくぐるとか、神社へお詣りするなどは遠慮した(2)。

(1) 永田の設楽美知家では三十五日にしてしまふ。

(2) (1) 南の細谷市蔵家では百日間くらいという。

(3) 永田の設楽美知家では一年間くらいはボクがかかっているといつて遠慮する。

ひがかり

ボクがかかっている、といい、死人の出た日、神棚に半紙を下げ、家族や親戚は宮参りやお日待ちなどへの出席は慎んだ。期間は死んだ人により異なるが、熊牛の渡辺継二郎さんの家では、両親が死んだ時は一年、兄弟で百日、親戚で半年位であった(1)という。

なお、どうしても神社などへ行かなければならないときは、オハライをして出かけた。

(1) 鍋ヶ谷戸の斎藤菊蔵さんの家では、三十五日くらいであるという。

年内に不幸のあった場合

一年以内に不幸があった家は、正月をやらす、正月前の精進落ちもやらなかった。(この項は熊牛の渡辺継二郎さんによる)

年忌

家によりちがいがあがるが、一年・三年・七年・十三年・三十三年目に年忌をする。

坊さんに来てもらつてお経をあげてもらい、塔婆を建てる。近所や親戚の人が墓参にくる。葬式まんじゅう、引物を用意する。とくに三十三年目の年忌の時は、杉の枝を一本とつてきて、塔婆の先端に逆につるす。流れ塔婆という(1)。
(1)長沢の田村富十郎さんの家では、サカサ塔婆とよんでい

る。
無縁仏

縁づかないままで死んだ人の場合をいう。子どもの場合も無縁に入る。葬式は控え目にやるのが普通。

なお、石塔を建てる場合、無縁仏のが石屋にあるので、それを建てる。

南の細谷市蔵さんの話では、大正時代までは、無縁の者が死んだ場合、竹で三本足をつくりゆわえ、その中心から繩をぶら下げ石をつるしたものであるという。『あの人は無縁仏だから三本足だ』などといった。

民俗調査班構成（人生儀礼）

調査員

川鍋幸三郎（市文化財専門委員）

加藤 策夫（福生第二小学校教諭）

木村 龍生（国学院大学院）

岡田 紀夫（市民）

藤森 雪江（市民）

峰岸 秀雄（市民）

村野 栄子（市民）

森田 潤三（文化財専門委員）

立川 愛雄（文化財専門委員）